# 九　観音寺物語

昼川村の佐々木治惣兵衛（現世帯主佐々木善次郎）という人がいた。この家は由緒のある家である。ある夜のこと、治惣兵衛が変な夢を見た。

観音寺の古寺山に四つの塚があり、その三つの塚の上に新しい魚が三匹いた。山の中に魚がいるのはおかしいことだと思っているうちに、白髪の老人が杖をついてやってきて、「ここを掘って見よ」と杖で塚をつついたところで夢から覚めた。

これは神のお告げによる正夢ではないかと思い、人を連れて鋤、鍬を持たせ、観音寺の古寺山に登った。文化六年巳巳七月二十七日のことである。若者たちに言いつけて掘らせたところ、一の塚の底は軟岩であった。その軟岩を掘りつづけると、中から紫銅の経筒のようなものに、同じ形の蓋のついたものが出てきた。

筒の周りには河原の小石をびっしりと敷き詰めて、その上に二振りの太刀を並べて石を覆い、土をかけたものであった。太刀は朽ちて、手に取るとこぼれ落ち原形をとどめなかったが、鞘の漆の色は変らずに残っていた。小石を除き、筒を引き出して土を除き、蓋を取ってみると、筒の中は七～八分めに濁り水が入っていた。

みんなは「なんの水だろうか？」と不思議に思っていると一人の男が「これは不思議だ。右縄の影はそのまま右に映る。左縄を綯って試してみよう」と言った。そばに生えている浅茅や小すすきを刈って左縄を綯い、筒の水に映すと、左縄は左に映った。見ていた人たちの着物も右前に映ったので「水鏡はみんなこうだろうか」と、田の水に映してみたが、そうではなかった。

「この水の中に宝物でもあるだろうか」ということで、水を流してみると、この銅器に「久安五年巳巳ノ五月五日僧良与」と二重文字で、この一二字が彫られていた。「この水はなんの水であり、右前の着物が右に映り、左前の着物が左に映るのはどうしたことだろう」と不思議がった。

「もう一つの塚を掘ってみよう」ということで、男たちが鍬で掘り起こしてみると甕が一つ出てきた。この甕の中にもさきのような銅筒が出てきた。この銅筒の中には朽ちてしまった麻衣の形をした物が入っていた。この甕の銅筒のまわりは土塊がびっしりと詰っており、刀はどの塚にもあったが、水はどういう水であったか知る人はいなかったという。

銅筒は経筒であり、昔は仏教だけでなく、すべての書を巻いていたようである。その経典を竹筴という竹箕に書を巻き納め、朝夕に読む経典を筒に入れて柱などに掛けていたものと考えられる。古い寺などには経筒の残っているものがあり、経筒型の花瓶などもあり、この塚に納めるためにとくに紫銅の筒をつくったものではないかと考えられる。

久安五年（一一四九）巳巳五月五日僧良与と彫ってある経筒に、観音寺の僧侶が物を入れて埋めたものではないだろうか。中世のころ、尾張国（愛知県）甚目寺のあたりの田の中から、大同某年と書かれた経筒が出てきたという。ほとんど砕けて「大同」の字だけが残っていたという僧侶の話を聞いたことがある。

この観音寺は、五十六代にあたる清和天皇の御代の観音寺の古寺跡ではないだろうか。この観音寺を調べるために、最上（山形県）、田川（山形県）、由利方面を聞き歩いたが、観音寺という寺は数多くあり、旧跡にも、田所、田畠などの字に観音寺という所が多かった。また秋

田の妹川村に、貞和三年（一三四七）の碑のある所を観音寺と言い、そのあたりからも祝甕が掘り出されたという。ここが昔の観音寺跡であると思い「雪の山路え」という書に書き記したのは筆の誤りである。このたび、平鹿郡上溝村の観音寺の古跡こそ、その訪ねる観音寺ではないだろうか…。

「三代実録」の貞観六年の項に「以二出羽国観音寺一預二之定額一」と記されている。また「同八年庚戌、以二出羽嶮伽寺一預二之定額一」と記されている。それは同じ郡にある湯香股という温泉のあたりに古寺の跡があり、そこではないかとも考えられる。観音寺こそ、貞観時代の古寺ではないだろうか。

貞観の年より久安の年まではおおよそ二百七～八十年を経ているが、それによってこの証拠とする。定額の事を書いた書は択山あり、徒然草に「諸寺の僧のみにあらず、定額の女嬬と云う事延喜式に見えたり。すべて人定まりたる工人の通号にこそ」とある。

また鉄槌の記文に「僧幾人、定イクット定メタル詞也云々」。また女官の下女需幾人、帰依シ、由サスーとある。

続日本記には「文武天皇大宝元年八月皇年満 者 不レ論レ官不皆入二賜レ録之定額一」とあり。弘仁式の文には「大政官府禁断京職畿内諸国私作二伽藍事一奉レ釈定額諸寺其数有レ限云々」とある。

また十八史略第七巻には「元以二耶律楚材言一始定二天下賦税一云々、出二糸一斤以諸王功臣湯沐之賜一塩毎二銀一両一四十斤永為二定額一」とあり、いずれも数の定めである。貞観の昔はこの観音寺も定額に預ったたいへん重要な寺の跡であったと思われる。

その時代は駅路ではないかとも思われる。